

# みんがひろくろく 民放史

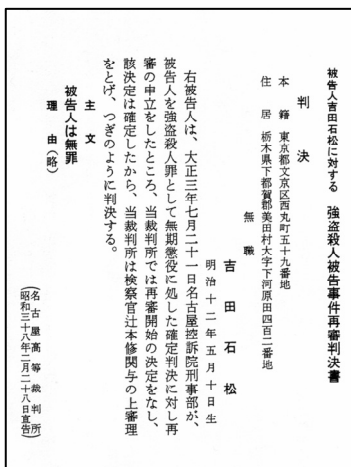
題字 中川 順

群衆の中の一つの顔 吉田石松事件

— 48年前のアリバイ証人を探して —

中村登紀夫 (TBS WOWOW)

今回の『民放史』は『関東民放クラブ』第42号(平成9年11月号)掲載の『民放史』を一部書き直して再録しました。



判決文(無罪)

名古屋。夏。駅前通りは蟻が列なるように人びとが往来していた。この群衆の中から一つの顔を探さなければならぬ。この街には何百万人住んでいるのだろう。

昭和35年の7月だった。その顔憶にある。

は、大正2年8月13日の夜、名古屋市郊外千種町の花村静江宅に遊びにゆき、塀の外をうろうろしていた怪しい人影・吉田石松を見ての取材だった。

牢獄に消えた23年の若き日々

昭和の巖窟王と呼ばれた吉田石松事件の概要を振り返りたい。

大正2年8月13日夜、名古屋市郊外千種町の路上で繭商人が殺され一円二十銭を奪われた。現場に近い大島湯の主人から、事件直前、被害者と吃りの男が一緒に歩いていたと聞いた警察は、翌14日、吃庄こと海田庄太郎と北川芳平を逮捕した。二人はすぐに犯行を認めたが、やがて、主犯は吉田石松だと供述を変えた。石松が逮捕されたのは翌15日の昼頃である。彼は事件の二週間ほど前まで現場付近の硝子工場で海田らと一緒に働いていたが、事件当時は現場から約6キロの渡辺硝子に住み込みで働



石松が語る拷問の絵

いていた。アリバイを主張、一貫して犯行を否認する石松に、調べは過酷を極め、拷問で幾度となく気を失った。

《一審判決》

被告人石松ヲ死刑ニ被告人芳平・庄太郎ヲ無期懲役ニ処ス。

石松は大審院まで争ったが、翌大正3年、無期懲役が確定する。

石松32歳、小菅、網走、秋田と23年に及ぶ独房生活が始まった。昭和10年、仮出獄した石松は東京で司法クラブに助けを求めた。重大な誤判事件を疑った記者たちが既に出所していた海田と北川を発見、詫び状を証拠に、昭和12年、獄中から数えて3度目の再審を請求したが、日中戦時下の日本では大正は遠い昔だった。

太平洋戦争の敗色濃い昭和19年、「詫び状は脅迫で書かせたもの」として請求は却下された。

次は昭和31年6月、東京法務局人権擁護部の努力で石松が再び海田と対決、これは、当日、ラジオ東京の番組『裁判』でも放送されたが、証拠採用されることなく、4回目の再審請求も棄却された。

## 堀場を探せ。絶対条件だ

5回目、石松の無罪への執念に応えたのは日本弁護士連合会人権擁護委員会だった。昭和35年1月、委員会は石松から事情を聴取した。当初から一貫して石松が主張するアリバイはこうだ《犯行の時刻は渡辺硝子工場に近い花村静江の所へ遊びに行ったが、先客がいたので家の周りをうろついているとき、静江と、知らない人だが先客二人にも顔を見られている》。その先客の一人が「堀場梯助」という名前であることは過去の記録にある。

日弁連も《原審記録はすべて焼失し、事件関係者も、殆どが死亡もしくは行方不明》のこの事件の困難さは覚悟していた(後藤信夫『昭和の岩窟王』。後藤さんは石松無罪の理論構築で再審を主導した主任弁護士)。だが、こうした困難をのりこえ、日弁連は花村を探しだして証言を録音した。

その録音を聴いた。「事件の夜、外を男がうろついていた。男が家の周りをうろついていたのは、その夜の九時頃一回だけである。堀場はよく遊びに来た」。更に「昔、

警察で調べられた時、違うだろうと何回も言われたが嘘は言えない」。私と山林アナウンサーは『目撃者の記録』の第一回はこれにしたいと言ったが、課長は「この事件は『裁判』で前に放送してらるだろう、キミ、もう一人の、この堀場を見つけないや番組ダメだよ。ゴールデンはじめての報道番組だよ」と首をタテに振らない。無理難題を言う人ではない。

だが、失敗は許されない。この証言だけでは弱いのは確かだ。



取材打ち合わせ

この年のはじめ編成の先輩からから電話があつて「ゴールデンに報道番組を作る。黙って俺の言うことを聞け。必ず手を挙げろよ」。

と言われて手を挙げた番組だ。覚悟を決めた。やつてみる他ない。最悪の場合、堀場が死んでいたというだけでも確認しよう。戦争、空襲、生きている可能性は、まずないだろう。

この事件の取材をとおして常に感じたのは、半世紀の「時の流れ」という、越えることの出来ない壁だった。

## 法廷で証言を変えた大島なお

取材の要点は四つ

- ① 堀場梯助を探す
- ② 渡辺硝子工場の石松の同僚を探す
- ③ 大島湯の女主人・なおを探す
- ④ 石松が花村宅に行く途中で雨宿りしたという氷屋を探す

最終目標の堀場は最後に廻した。彼が発見出来なくても番組が制作出来るように周辺を固めたかった。いざとなれば、弁護士会に花村のテープはある。

このとき、私たちの知っていたことは、石松の元の雇い主の加藤半十郎が市民病院に寝ていること、大島湯は経営者は替わっているが風呂屋が同じ場所にあることの二

つだけだ。関係者を探すといつても「せめて死亡を確認できれば」といった方がよいかもしれない。最初は現場である。当時、畑の中だった千種町も、今は名古屋市中心部に近い。写真で見たとおりの大島湯の古ぼけた建物が見えた。勿論、主人は大島なおの消息は知らなかった。

なおは法廷で警察での最初の証言を覆している。警察では最初、被害者の後を歩いていたのはこの人ではないと否定したが、法廷では石松を指して、「この男のように思います」と変わった。なぜ証言を覆したか、聞きたかった。

今の風呂屋がダメなら古い住人なら消息を聞けるかもしれない。方法の一つ。古い家を探し、「お年寄りはいらっしゃいますか」、恰好の老人がいた。だが判ったことは、なおが数年前に死んだことだけだ。大島なおの名前に死亡と書いた。

## ほったらかしだった証人たち

加藤半十郎は市民病院の結核病棟で快く話してくれたが、石松はそんな男ではないという心証に過ぎず事実は何もない。勿論、堀場

梯助は知らない。話が一段落した後でフト口にした「古い硝子工場がある。石松の古い仲間の名前が判るかもしれない」。その工場の専務から、私たちの捜し求める最初の人物、早川良一の名を教わった。

守山に住む早川良一は石松の逮捕現場に居合わせたと言った。彼の表現を借りれば刑事が来た時、

石松は「ボケっ」として、なにに行かならんナという顔しとった。同じ心証とはいえ加藤半十郎とは格段に違う。しかも彼は住み込みで石松と一緒に部屋だった。事件の晩は早く寝たので石松が帰った時のことは知らない。だが逮捕されるまでの様子は普段と変わらなかった。これが彼の記憶である。「ところで堀場梯助という男を知りませんか」、首を振ったが、こう付け加えた「あの頃の夜遊びといえは渡辺惣市だ。あの男なら何かわかるかもしれん」。

その足で渡辺自転車店に行く。隠居の渡辺惣市は白髪頭をかきながら昔の記憶をたどってくれた「石松が渡辺に來た暫くの間だったかの、友達もできんで、寂しそうだったもんで、遊びに行かんかって連れだしたことがあったナ。

それで、その時ヨ、娘を紹介したワ、しーちゃんいうとった。確か、しづという名だったナ。その時はしづの家を教えただけで帰った」、事件の数日前の話である。「その夜わしは花村の家に行った」という石松の言葉が実感として迫ってきた。

48年前の真実に、微かに光がさしはじめた。この人も堀場梯助は知らないが、そのころの遊び仲間伊藤庄次郎を紹介された。

すでに夜も遅かった。伊藤訪問は翌日に廻した。堀場梯助はまだ遠いが、取材はいい方向で進んでいる。ゆっくり寝よう。

翌日、この三人目の話は私たちを更に驚かせた。伊藤は石松逮捕の前日か前々日に「花村の家に遊びに行かんかと石松に誘われたがその夜は用があり断った」、石松も「その夜、友人を誘ったが断られたので一人でいった」と言っている。両者の話は完全に一致する。

伊藤は石松逮捕は事件の翌日だと記憶しているが、実際は翌々日であるから、前日か前々日は、12、13、14日のいずれかになる。48年前の日付を「何日か思い出しませんか」、無理は承知だ。伊藤は首を

振った。この時ほど時の流れの切なさを感じたことはない。

だが、彼の話は内容豊富だった。凶器と断定された尺八に異常がなかったこと。石松の浴衣には血も付着していなければ、一緒にいて着衣を洗う姿も目撃していない。

ところで石松の同僚三人の話で驚いたのは、三人が大正2年以来、はじめて事件について質問されたと語ったことだ。当時の捜査は、裁判は、何を調べ、何を証拠に、一人の人間を裁いたのか。

翌日曜日。渡辺工場から花村宅と思われる辺りまで、昔の道筋を考えながら歩いてみた。石松が雨宿りしたという氷屋は諦めた。

いよいよ残るのは堀場梯助だけになった。が、一旦、神戸に行くことにした。北川芳平が入院していた病院の医師が生きていたらという微かな希望を抱いていたが、無駄だった。

## 群衆のなかの一つの顔

名古屋に戻る。雑踏は同じだ。

堀場梯助が今も生きていて名古屋に住んでいるとしたら、区役所を風潰しに廻ればいい。花村の家

は現在の北区にあった。とすれば、堀場の家も北区ではないか。まず北区役所を訪れ、戸籍係に「大正2年の戸籍簿が残ってますか」と聞いた時の緊張は今も忘れない。「戦災で焼けました」のひと言ですべて御破算になる。「はア?」、

係のお嬢さんも怪訝な表情を隠さない。事情を説明すると黄ばんだ埃まみれの戸籍簿を荷物車で運んできた。分厚い綴りが机に山積みされた。それを一枚一枚めくり堀場姓を全部探し出す作業である。見かねた数人の職員も手伝ってくれた。堀場、々々、年齢は大正2年に20歳から30歳前後であろう堀場を片っ端から調べる。何時間経つたろうか……「堀場貞助」が、あった：当時、22、23の歳である。

年齢は心配ない。ただ、私たちが知っているのは、堀場「梯助」で「貞助」ではない。しかし、北区には他にこの名前はない。名古屋が何百万人か知らないが、こんなに条件が合う堀場「テイスケ」が、もう一人いるとは考えられない。

違ったらまた探そう。  
現住所を聞いて堀場「貞助」

を訪ねた。小さな雑貨屋であった。店先に、ちょうど年格好の爺さんが座っている。さて何と話しかけるか。うっかり「昔の裁判で」とは切りだせない。人違いだったらドヤされるだけだ。老人である。

裁判所に呼ばれるなんてまともなヤツではないというアタマはごく一般的だ。まして殺人事件に絡む話である。おとなしく「お爺さん昔のこと聞きたいんですけど」……「群衆のなかのたった一つの顔」が、そこにあつた。

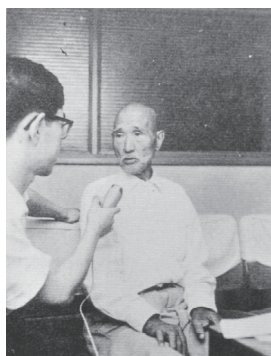
「若いもんだで、娘のところへ遊びにゆくもんだで」、「その晩いらした時、静江さんのお宅ですか、そこで男と会わなかったですか」、「その日は、大野という仁と一緒に、そんな男がおったちゅうぐらいのことやナ。しっかり見分けのないもんやで、お互いに外へ出て、こういうヤツやというくらいのもんや、それだけでもネ」。

石松も「花村の家の周りをうろついているとき、先客の二人の男にも顔を見られた」とアリバイを主張している。

48年前の大正2年8月13日夜9時頃、花村静江宅の垣根の周辺で繰り広げられ、幻のように思え

たドラマがくつきりとした現実の情景となつて浮かんできた。

吉田石松との、その後3年に及ぶつきあいの始まりだった。



インタビューを受ける

### 翁の余生に幸多からんことを

取材した証人は弁護士会に知らせた：「日弁連では、中村登記夫指示の伊藤庄次郎、堀場貞助、早川良一らを尋問：それが再審請求の力強い支えになったのである」(後藤信夫・前掲書)。

吉田石松の再審開始が決定したのは、昭和36年4月11日だった。名古屋高裁第四部法廷、小林裁判長が、低い、呟くような声で言い渡した「本件について再審を開始する」。一瞬騒然となった法廷の中央に、ただ独り座り続ける石松の目に涙が溢れ、やがて笑顔に変わっていった。私は吉田老人の笑顔をこの時はじめて見た。あまり

にも過酷な運命に弄ばれた、くしくしやな笑顔であつた。

夜、日弁連の慰労会に招かれた。ビールを注ぐと、石松じいさんはふるえる手でグラスを持つてうまそうに飲んでいた。いい顔だった。

だが再審の壁は厚かった。検事異議申し立てで再審の是非は高裁第五部の審議に任された。第五部には四回目の再審請求を棄却した谷口正孝裁判官がいる。おかしな話だが、裁判官が担当を回避しないかぎり、弁護側が回避出来ない。谷口裁判官は回避しなかった。

37年2月1日、五部は決定を下す《原決定を取消す。本件再審請求を棄却する》……弁護側は《再審請求棄却決定に対する特別抗告》を最高裁に提出した。

最高裁は法律論である。特別抗告を番組にするのは難しかった。刑事訴訟法を生まれてはじめて隅から隅まで読む。判らないと後藤さんに聞いた。ナレーションに誤りがないかも聞いた。後藤さんは「卒論のような番組でしたネ」。昭和37年10月30日、最高裁判所大法廷が決定を下した《原決定を取消す。本件再審請求事件につき、名古屋高等裁判所がした再審

開始決定に対する原審検察官の異議申立を棄却する》。意見は裁判官全員一致である。



名古屋高裁法廷

石松の願いは再び第四部の小林裁判長の手に乗ねられた。年齢82歳、余命を気づかつて審理は迅速に進み、判決は昭和38年2月28日と決まった。

それまでは欠かさず再審の法廷に通っていたが判決の法廷で取材する願いは叶わなかった。当夜は報道シリーズ『五十年目の判決』の放送だ。山林君に一人で行つてもらった。前後、島津報道部長が心配して「トキオ、本当に無罪か。裁判はわかんねえからな」「大丈夫です」。それ以外に答えようがない。私は無罪の素材しか持っていない。



かった。万が一、いや、私にも取材者の誇りがあつた。万が一はあり得ない。

28日午前10時過ぎテレビ速報が流れた。《主文・被告人は無罪》。吉田石松との3年間は報われた。薄暗い編集室でテープを編集しながら止めどもなく涙が流れた。

小林登一

裁判長は無罪を言い渡した判決文をこう結んだ《当裁判所は、被告人、否、ここでは被告人というに忍びず、吉田翁と呼ぼう、われわれの先輩が

翁に対しておかしな過誤を、ひたすら陳謝すると共に、実に半世紀の久しきに亘り、よくあらゆる迫害にたえ自己の無実を叫び続けてきたその崇高なる態度、その不撓不屈の正に驚嘆すべき精神力、生命力に対して、深甚なる敬意を表しつつ、翁の余生に幸多からんこ



50年目の無罪(故青山与平氏提供)  
青山さんは元都新聞司法記者、石松の訴えを最初に聞いて海田庄太郎を探し出すなど終生石松を助けた恩人

とを祈念する次第である》。

いささか面映ゆいが後藤さんは著書に書いてくれた「殊に、石松にとつて何よりの救いは、報道関係者の支援と協力だった。七人の新聞記者以外に、ラジオ東京のプロデューサー中村登紀夫と、ア

ナウンサ  
ー山林正  
明の名を  
忘れては  
ならな  
い」。

これは  
私の推測  
だが谷口  
裁判官も  
心中は石  
松は無罪  
と思つて  
いたので

はないか。弁護側が特別抗告を出したとき谷口さんを自宅に訪ねた。「法的には再審はできない。他に救い求めるべきです」、「たとえ宗教ですか」、「まあ、苦しそうな答えだった。法律家である、法解釈を厳密にすれば救えない。片や、小林さんは法律家である前に人間

であつた。判決後に小林裁判官の自宅を訪ねたが、実にものやわらかい人だった。

余談だが、谷口さんはこの直後、東京地裁八王子支部に左遷されたが、最後は最高裁判官になり、幾度となく少数意見を述べ、法解釈一辺倒の判事と亘り合つて生涯を終えた。

### 短かった幸多き日々

吉田石松が、その84年の人生の中で幸多き日々を過ごしたのは、この日からわずか9ヶ月だった。思えば祝賀会でビールを注いだのがじいさんと一緒に最後だった。



ビールを注ぐ筆者(左)

いつか小山の家を訪ねて、長い思い出話を聞きたいとの願いは果たせなかった。9月に父死亡、10月に編成に異動、11月に結婚。

取材記者なのに、じいさんを背に法廷に入つたこともある。そんなことを考えると、身辺の変化で時間がとれなかったことが今も悔やまれてならない。

あのじいさんなら、まだ大丈夫だろう。いつか酒飲みながら話を聞こう。そうだ、じいさんに何回か五百円貸したなあ「ビール飲みたいんだ」「いいよ。最初のとき気になる言葉が一つあつた。「ダンナ五百円貸して」って言ったのだ。相手は子供のような年齢じゃあないか。刑務所生活で身についたのか。「ダンナ」は止めてよで、一度だけだったが、とてつもなく悲しかった。

吉田石松事件の取材について、私は困難ばかり強調した。しかし、彼は警察の取り調べ同様、刑務所でも、オレは犯人ではないと囚人労働を拒否、網走で雪の中に立たせるなど過酷な懲罰をうけながらも頑として無罪を主張しつづけた。その信念が、どんなに取材の意欲を助けたことか。

その石松が、ただ一度刑務所で号泣したことがある。小菅。母が面会に来た。囚人服の石松をみて、



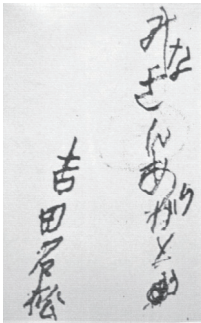
無罪を伝える新聞

母はひと言も口を開くことができず、泣いて帰った。犯人ではないと言っても刑は確定して刑務所にいる現実を疑うことはできない。母の後姿をみて石松は号泣した。「オレはなんという親不孝か」

昭和38年12月1日、後藤さんから電話で吉田石松の死を知らされた。

「中村さんと山林さんにお礼を言ってお下さいと病床で言われた」：電話の向こうで後藤さんの声が震えていた。じいさんに、巨星墜つは相応しくないナ、と思いつながら、吉田石松は、日本の裁判の戦前に終止符を打った男であるという思いはある。葬儀にも行かれず、

年が明けてから後藤さんに誘われた「石松のところ、一緒に行きましようよ」。仏前に花を捧げた。じいさんの写真は笑っていた。



感謝の気持ちの色紙

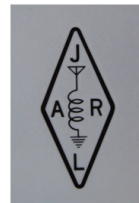
資料提供(筆者)

石松翁が無罪になったとき84歳であった。だが、翁は32歳で死んでいる。当時働き盛りの壮健な身体も人手を借りないと歩くこともままならなかった。無罪によつて彼の人権は本当に守られたと言えるのか。独房で過ごした23年間、本来なら、結婚し、子供もでき、燦々と降る明るい太陽のもとで過ごすことこそ、人間としての権利だったのではないだろうか。

晴れて無罪になった今、孫、子もなく、覚束ない足取りで一体何処に行くのか。残されたわずかな生命の日々を前に取り戻した笑いが、はたして人間の笑いと言えるのだろうか。私は、その笑顔の裏にある影を、今も忘れない。

関東民放クラブに、アマチュア無線同好会が、近く誕生！

会員を広く募集中



ロゴマーク

「ハローCQ、ハローCQ、こちらは、関東民放クラブ、アマチュア無線局です。どなたか、お聞きの局長さん、おられましたら、コール下さい。」とアマチュア無線を通じて、会員同士の交流と親睦を図る目的で無線同好会が、3月上旬を目途に関東民放クラブ内に誕生する事が理事会で承認され、その設立準備委員会が、平成24年1月24日に開催される事になった。

クラブの名称は、「関東民放クラブ・アマチュア無線同好会」又は、略称「関東民放ハムクラブ」とし、関東民放クラブの会員で構成し、運営する。

また、活動については、会員のアイボールミーティングや各放送局無線クラブの現役会員との交流、それに、ロールコール、移動運用、コンテスト参加、さらには、非常災害時の対応など、そして、将来には日本民放クラブ会員との全国



出番を待ってます

ネットワーク化も目標にしたいと思っている。この

設立準備委員

会の開催にあたり、地域の参加者の応募をはじめ、関東以外地域の日本民放クラブ会員で、オブザーバーとして出席し、「是非、応援し協力しよう」と思われる会員の方も、関東民放クラブへ

03 (3265) 7597

アドレス

hiropok@world.ocn.ne.jp

ご連絡をお願いいたします。

お問い合わせ、

秋田 完 (TX)

03 (3411) 3677

鈴木 賀夫 (HBC)

043 (270) 0725

橋本 春海 (CTC)

043 (278) 4800

